

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院東門と東第二堂（飛鳥藤原第 125 次）

藤原宮朝堂院は、内裏・大極殿と並んで、宮の重要な空間であり、現在でいえば国会議事堂に相当する施設です。朝堂院には東西対称に 12 の瓦葺き礎石建物が整然と並んでいました。その外側には南北 318m、東西 235 m の回廊が取り囲み、南と北には門が開いていました。一方、発掘調査や文献史料の研究結果から、後の平城宮、長岡宮、平安宮では、東西南北の四面すべてに門が存在したことがわかっています。しかし藤原宮では、東西の回廊での門の存在は今まで未確認でした。そこで飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、その確認を目的に、1 月 7 日から 4 月 14 日にかけて、発掘調査を実施しました。

調査の結果、東の回廊の中央付近で、大型の礎石、その据え付け穴、そして屋根から落ちる雨水を受ける雨落溝など、門の存在を裏付ける証拠を見つけました。門の南側 1/3 程度は、調査区の外でしたが、過去の調査結果なども併せて考えると、桁行 3 間、梁行 2 間、柱の間隔は 5.1 m の八脚門に復元できます。また今回の調査では、昨年春にその北端を確認していた朝堂院東第二堂の調査も併せておこないました。その結果、建物の南端部分が確認され、その建物規模が桁行 15 間（南北 62 m）、梁行 5 間（東西 15 m）であることが確定しました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 渡辺丈彦）



手前が東第二堂・奥が東門（西から）

川原寺寺域北限（飛鳥藤原第 119・5 次）

史跡「川原寺」地内の北端で、2 月から園地整備に伴う確認調査をおこなっています。調査面積は 307 m²に過ぎませんが、遺構の密度は高く、当初予想しなかった重要な発見が相次いでいます。

川原寺は斉明天皇の川原宮の故地に、その子である天智天皇が創建したと考えられている寺です。7 世紀末頃には、飛鳥寺・大官大寺・薬師寺とならんで四大寺とされました。1957～59 年の奈良国立文化財研究所による調査で、1 塔 2 金堂形式の伽藍配置が明らかになっています。

今回の調査での最大の成果は、川原寺の北面大垣を確認し、寺域の南北の規模が飛鳥寺と同じく 3 町（330m）であると確定したことと、寺域北部で寺院付属工房を発見したことです。

調査区内には金属加工の炉跡が多数あり、大量の鉋滓が出土しました。炉跡群は川原寺の創建期（7 世紀後半）から平安後期に及び、継続的に工房が営まれた様子がうかがえます。また調査区中央では、融着した瓦が多量に出土したため、西側の丘陵斜面には瓦窯があると推定できます。

調査区南半の丘陵裾には、巨大な鑄造土坑があり、科学分析と鑄型の形から、鉄釜を鑄造した土坑と判明しました。また南端には、鉄釜鑄造に用いた溶解炉片が一括投棄されていました。これらの年代は 7 世紀末頃で、鑄鉄遺構としては最古です。奈良時代には、この鑄造土坑を壊して建物が建てられました。

6 月 9・10 日におこなった現地見学会では、平日にもかかわらず 1,350 人余りが詰めかけ、古代の技術の高さに感嘆の声をあげていました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 富永里菜）



現地見学会の様子